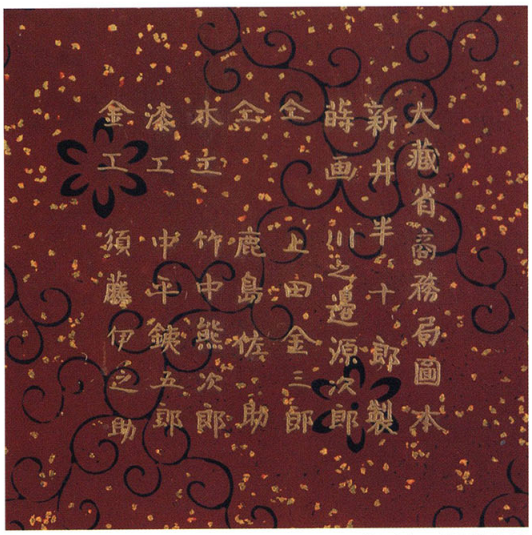
3　川之邊一朝ほか
《鳳凰唐草春草蒔絵棚》

明治十四年（一八八一）
木製漆塗・蒔絵
六一・八×一〇七・〇×九〇・六
東京府　第三区第三類

一基

明治十四年の第二回内国勧業博覧会に新井半十郎により「書棚」の名称で出品された作品。古式に倣った二階厨子の形の棚だが、蒔絵の図様にはさまざまな要素がとりこまれている。棚板表には正倉院文様など古代の文様から引用した花唐草と瓔珞、尾長鳥が組み合わされ、棚板の縁、柱には名物裂から引用した霊芝に麒麟の文様を配している。これに対して厨子の扉を含めた四側面には春蘭や福寿草、菜の花、蓮華草などの春草が写実的に描かれる。色漆が多用され、蒔絵技法も工夫が凝らされて、色彩豊かに仕上げられている。『臨時買上録』（明治十四年、宮内庁書陵部蔵）によれば、本作は農商務省の買い上げ品に内定していたが、明治十四年六月十七日に明治天皇が博覧会会場へ行幸された折に御覧になり、お買い上げになったものである。

棚背面左隅に蒔絵銘があり「大蔵省商務局図本　新井半十郎製　蒔画川之邊源次郎　仝上田金三郎　仝鹿島佐助　木工竹中熊次郎　漆工中平銕五郎　金工須藤伊之助」と記される。大蔵省商務局図本とは、明治政府が内外の博覧会出品や貿易品の意匠指導のために、明治八年から十四年頃にかけて製品画図掛（内務省、大蔵省、農商務省と管轄が移動）が作成した図案のことである。集められた図案は八十四帖からなる『温知図録』（東京国立博物館蔵）として編纂され、本作品の図案もこれに含まれている。製作者の新井半十郎は、当時日本橋区通旅籠町大伝馬にあった漆器商である。新井家は明和年間の頃より幕府へ蒔絵器物を調進しており、維新後、半十郎の父半兵衛はウィーン万博以降、万博へ積極的に出品している。蒔絵師の筆頭に名のある川之邊源次郎は、後に帝室技芸員となる川之邊一朝（一八三〇～一九一〇）の本名である（明治二十七年に一朝を本名とする）。一朝は三十歳の頃から新井半兵衛の委嘱を受けるようになり、維新後の内外の博覧会にも新井親子の出品作を数多く手がけている。古式の形式や文様を翻案し、さらには写実的な絵画表現を組み合わせた意匠には、この時期、海外へ向けて発信された日本の工芸品の姿が示されている。


大蔵省商務局図本
新井半十郎製
蒔画 川之邊源次郎
金工 上田金三郎
木工 鹿島佐助
漆工 竹中熊次郎
金工 中平鐔五郎
須藤伊之助
背面左下隅蒔絵銘

背面

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

内国勧業博覧会――明治美術の幕開け
三の丸尚蔵館展覧会図録No. 57

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十四年四月二十一日発行
© 2012, The Museum of the Imperial Collections